



熱意と明確な目的意識が、インターンシップ成功のカギとなる。

インターンシップ概要

実施期間： 2018年10月2日～12月26日(3か月間)
受入企業： シスメックス株式会社
実施テーマ： 血栓症診断のための技術獲得

——今回のインターンシップでは、実施テーマはどのように決められたのですか？

藤山 (以下敬称略) まず、中山さんの方からテーマをいくつか提案していただきました。あわせて、普段の研究についてもプレゼンしていたいて、それを受けて、弊社のほうで進めていきたいと考えているテーマのなかで、中山さんの関心とマッチングするものを提案させていただきました。

中山 私から提案させていただいたテーマのうちのひとつと近い内容で、かつそこまで慣れているようなものでもなかったので、自分の技

術として得られるものも多そうだと感じました。

——自分からテーマを提案するのはすごいですね。

中山 大学コーディネーターの山岸先生や、リーディング大学院の先生から、「テーマを提案したほうがいいのではないかな？」というアドバイスをいただきました。自分からテーマを提案すれば、もしそのテーマが採用されなかったとしても、自分の関心を持つ分野や持っている技術を示すことができ、意思疎通がはかりやすくなると思いました。

——インターンシップではどのような点に苦労されましたか？

中山 今回のテーマでは、慣れない手法を用いたので、最初の方は装置の操作方法が分からなかったり、関係する論文を読むにしても、私は生化学分野が専門なのですが、医療系に近づくにつれて、自分の知らない専門用語が多くなってきて、戸惑いが増えました。

藤山 私は入社4年目なのですが、これくらい長期間にわたって誰かを指導することは、はじめてで。今回のテーマについては、私にとってはわかっている部分が多いわけですが、彼女にとってはそれが全部はじめてのことなので、彼女がわからない部分がどこなのか、どういった情報を提供すれば理解につながるのか、どうしたらスムーズに進められるのか、そういったことを解決するのに苦労しました。

——インターンシップを通して一番成長したと思う点はどこですか？

中山 実験に関して不慣れな部分も多かったのですが、藤山さんや多くの方々を手伝っていただいて、解析方法も基礎から教えていただいたので、実験の基本的な組み立て方や、操作手法が身についたことが一番の収穫でした。

藤山 実験のスキルとは違う部分でいうと、中山さんは報告・連絡・相談がしっかりできる方だったと思います。積極的に具体的な話をその都度してくれることで、スムーズに実験をすすめていくことができたように思います。それから、コミュニケーション能力が非常に高く、基本的な業務で関わる人だけではなく、わからないことについてはその分野の専門の人のところに聞きに行ったりしていました。自分から積極的に人間関係を構築して、困難な部分を乗り越えていったのだと思います。そういったところはさすがドクターの学生だな、と思いました。

——大学の研究とどういった点で違いがありましたか？

中山 企業での研究では、密に計画が立てられていると感じました。大学だと順番は決まっていますが、期限ははっきりとは決まっていなくて多いので。毎週や毎月の目標管理など、スケジュールの管理が大学とは全く違うと思いました。それから、チームでのディスカッションもとても面白かったです。メンバーの方がそれぞれ様々なバックグラウンドを持つ方たちで、色々な意見が出るのが新鮮でした。

今回、企業での研究開発に携わらせていただいて、社員の方々が組織の中でどの役割を担ってお仕事をされているのかとか、入ってみないとわからないことがすごく多くて。3か月という長期間であったからこそ、普段の業務ではあまり関わらないような方もコミュニケーションをとることができたり、とても貴重な経験をさせていただきました。



藤山 真吾 様

シスメックス株式会社
中央研究所 第二研究グループ



中山 萌絵香 さん

お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科 理学専攻
博士後期課程 2年

——最後に、後輩に向けて一言お願いいたします。

中山 自分が興味をもっている企業で、大学の研究との兼ね合いとしてベストなタイミングで行けると、とてもいいと思います。大学で学べることには限りがあって、外からの情報が入ってこない部分があります。企業でのインターンシップを通して、すごく色々なことを学ばせていただいて、私は行って良かったな、と思っています。

■研究インターンシップで求める人材

シスメックス株式会社 人事部 人事課
相川 修一 様

C-ENGINEの取り組みもあって、今、より多くの博士課程の学生のみならずがインターンシップに関心をもつようになってきていると思いますが、そのなかであって、学生本人が目的をもって参加することが一番大切なことだと思います。応募学生のなかには、学生本人の気持ちが見えてこないような人もいます。インターンシップは時間もかかりますし、大学での研究もストップしてしまうことになるので、なんとなくの流れで来てしまうと、誰も得をしないものになってしまいます。ですから、中山さんのように、ご自身でテーマを考えてもらえるぐらいの姿勢のある方に対して、我々としてはぜひ協力させていただきたいと思っています。それから、研究インターンシップを通して、企業と大学が目指しているものの違いというのを感じていただきたいと思っています。用いる技術の差など、目先のことももちろん重要なことなのですが、最終的な狙いの違いについてもインターンシップ中にふりかえていただけたらいいですね。

■インターンシップ実施までのスケジュール

- 5月** 研究インターンシップ&博士のキャリア支援説明会
▶C-ENGINEの研究インターンシップについて知る
- 6月** 大学の学生・キャリア支援センターにて面談
エントリーシートを作成・提出
- 7月** 面接(1回目)
大学での研究紹介・自主提案テーマのプレゼン
▶インターンシップ受け入れの検討
- 9月** 面接(2回目)
実施する研究内容に関するディスカッション
受け入れ担当者との顔合わせ
- 10月** インターンシップ開始!!

◆教員の視点◆



お茶の水女子大学
基幹研究院自然科学系 教授
相川 京子 先生

——今回、中山さんは3か月間という長期のインターンシップに参加されましたが、大学での研究との両立のポイントは何でしょうか？

以前、私の研究室から東京の企業に長期インターンシップに参加した院生は、1週間のうち3日半は企業で、1日半は大学に出るというスケジュールでこなしていました。本人の希望で、研究室のゼミにも継続的に参加できるようにということでした。

今回の中山さんの場合は、インターンシップ先が遠方でしたので、大学にも来ながら、ということではできなかったのですが、インターンシップに行く前には、できるだけ頑張って研究を進めていましたね。それから、インターンシップから帰ってきてからも、すぐに気持ちを切り替えて研究に戻っていました。インターンシップ期間中も、もちろん自分の研究に関する実験はできないけれど、論文の原案を考えると、ある程度、研究とインターンシップとを同時進行でこなしていたようです。長期間のインターンシップに参加するにあたり、こういったスケジュール管理ができることはポイントになるのかもしれない。

——インターンシップに参加することによって、学生にどのような変化があったと思いますか？

中山さんはこれまで、リーディング大学院のプログラムで海外のインターンシップにも参加していましたが、今回のインターンシップを通して彼女が得られたものとして、マネジメント能力があげられると思います。学内と学外に対する交渉を通して、やりたいことを実現・達成したということが大きな経験になったのではないかな、と思います。今後、企業に入ったときにも、たとえば新しいプロジェクトを始めるとか、知らない人とのネットワークを作っていくときに、今回の成功体験から自信を持って取り組めるのではないのでしょうか。

——今後、学生をインターンシップに送り出す際に、どのようなことを期待されますか？

大学にいただけではできない経験をできるといいですね。たとえば、本学の環境でいいますと、1研究室に教員1名、院生数も10名に満たないので、人間関係に限られているということがあります。企業では色々なバックグラウンド・年齢層の方と交流する機会が豊富にあると思いますので、そのなかでコミュニケーション能力も磨いてほしいと思います。それから、企業で経験した最新の研究に関して、もちろん守秘的なところは難しいとしても、大学での研究活動におけるアイデア創出に生かしてくれるのではないかと期待しています。

今回、実施する研究テーマに関するディスカッションのための面談に私も同行いたしましたが、学生がインターンシップへ行くことを通じて、産学連携がすむきっかけが出来ると良いと思います。